

「どうですの提督？わたくしに座つてもらえてとても光栄でしょう？」

「わたくしは鈴谷と違つてやさしいから、提督を殺そうなんて考えませんわ♪」

「それに鎮守府も守れない様な役立たずの提督には

ピッタリの役目だとは思いません♪…つて、聞いてますの提督？」

「え、この姿勢が辛いんですの？なにを言つてるのかしら♪

椅子はそんな事を言いませんわよ♪」

「ほら、これを差し上げるから頑張つてくださいな♪」



「うふふ、パイプがまるで尻尾みたいですよわよ♪」

「こうして見ると、ブタさんみたいですよわね♪」

「ほらほらブタさん？まだパイプは動かしてませんわよ、

そんなにうれしそうにリードを引つ張らないでくださいな♪」

「体もビクビクしてきて、ちよつと座りにくいですよわね…っつて、まやあつー」
「もう、しつかりしなさい！わたくしが落ちそうになつたでしょううー」



「賤けが足りませんわね、ちゃんとわたくしの言う事を聞かないと、このままリードを引つ張りあげておチンポを引き抜いてしまえますわよー！」

「あら、生意気にもリードを引つ張る力が強くなつてきましたわね、こんな事をされて興奮してるんですの、提督？」

「気持ち悪いですわね♪」

「わたくしはただ賤けのなつてないブタさんにお仕置きをしているだけですわよ♪」

「えい！……えい！……ほらほら、早く萎えさせないとおチンポがへし折れてしまいますわよ♪」



「あらあ、射精してしまつたんですの？」

「もおーつ、提督のせいで廊下の床が汚れてしまいましたわ」

「本当に節操のないブタさんですわね、これはもう本気で賤けないとダメかしら？」

「っ
ぱん
ぱん

「それとも鈴谷の提督さんと、取り換えてもらおうかしら？」

「どうですの提督、どちらがよろしいかしら？」

「うふふ♪そう、わたくしがいいのね、でしたら覚悟なさい

わたくしの賤けは厳しいですわよ♪」

んんん

びんぎんぎん

びんぎんぎん

びんぎん



「このブヨブヨに太ったドエブタ提督を

わたくしの言う事には何でも従うおりこうさんにしてさしあげますわ♪」

「でも、もしわたくしの言う事に逆らったら、

その時は鈴谷の提督さんと取り換えてもらいますわよ♪」

「提督程度の早漏おチンポじゃ、

鈴谷にすぐに飽きられて殺されてしまうかもしれませんが♪」

「もし生きていたのなら、わたくしの言う事には逆らわないほうがよろしくてよ♪」

「では、わたくしも本気を出させていただきますわ♪」



「うふふ♪やはりいいですね、この姿♪

つと言つても、提督はマスクを着けているから見えないのでしたわね♪」

「ご主人様にいただいたこの洋服

力がみなぎつてきますし、それにとつてもエッチなんですのよ♪」

「胸のところは布が少なくて乳輪がはみ出てしまっているし、

スカートなんてスケスケで下着が丸見えですわ♪」

ニヤッ

「見たいんですの？うふふつ、ダメですわ♪

提督が見たくても、わたくしが提督の下品な顔を見たくありませんもの♪」

「ではまず、手始めにお尻のバイブを振動させますから、そのままの姿勢を維持しなさい」

「もしまた、わたくしを落とすしそうになったら…わかつてますわよね♪」



「うふふ♪まるで尻尾をうれしそうに振ってるみたいですよわね♪」

「ほらほら、がんばりなさい！その調子ではまたわたくしがすべり落ちてしまいますわよ♪」

「そうですね♪そうやって必死に耐えなさい♪

「ちやんといい子になつたららご褒美も考えてあげますわ♪」

「そうですねえ…わたくしの靴を舐める許可をあげますわ♪」

「光栄に思いなさい、わたくしの体に自分の意思で触れるんですよ♪」



「んっ、なんですか？おチンポがまたピクピクしてきましたわ？」
「もしかして、また射精しそうなんですか？」

そうですね…もう床は提督の精液で汚れてしまいましたし、何回出しても「締ですわね」

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ

「ただし、出すたびに提督が自分で床を舐めてキレイにするんですよ」
「それでもよろしければ、出してよろしくってポド」



「うふふ♪また床を汚してしまいましたわね♪そんなに床を舐めたいんですの?」

「卑しいプタさんですわね♪」

でも、よくわたくしを落とさなかつたですわね♪エライですわ♪」

「えつご褒美?なにを言ってるんですの?」

まだ賤けは終わってませんし、床の掃除もまだですわ♪」

「ふう、まだ賤けが足りませんわね…次はどんな賤けにしましょうか♪」

「そうですわ♪今度はパイプのかわりにわたくしのヒールを突っ込んで差し上げますわ♪」

ウウウウウウ...

ヒール!

ヒール!



「熊野お〜」

「あら？鈴谷が呼んでますわね」

「ちよつと、行って来ますからその間に床をキレイにしてくださいのよ」

「ちゃんとキレイにできたらまた賤けの続きをしておげますわ♪」

「もし、すこしでも汚れが残ってたら、うふふつ、わかってますわよね♪」

「それでは行ってきますわ、ちゃんとキレイにしておくんですのよ、惨めなブタさん♪」



「やあん、ご主人様♥いくらここが人通りの少ない所でもダメですよ♥」

「えっ？そんな事を言っても嫌がってない？そんな事当たり前じゃないですか♥」

「ご主人様から求められて嫌なはずがありません♥でも、もし提督に見つかったら…」

「ふふっ、たしかに♪それはそれで好都合ですね♥

では遠慮なくいつばいいチャイチャイしましょう♥」

ク.

ガッ

「ああん、入ってきました♥

おチンポが入っただけなのに、私のおマンコはもうイツちやいそうです♥」

「ああ、なんて嬉しいおチンポ♥

提督のおチンポとはくらべものにならないくらい気持ちいいです♥」

ずんずん

「ええ、あの人はいつも先にイツてしまつて

私は提督のおチンポでイケたことがないんですよ♪」

「それなのに『気持ちよかつた?』なんて聞いてくるんですから

お世辞を真に受けて喜んでるのは本当に笑ってしまいます♪」

「それにくらべてご主人様は、私が気絶するまで気持ちよくしてくれて

ふふつ、まさに月とすつぽんですね♥」

「ふえ？なんで抜いてしまわれるのですか？」

「えっ、提督！？どうしてここに？私を探しに来たのですか？」

「そうですか、運悪く見つかったてしまいましたね…えっ、どう言う事が説明しるのですか？」

ずぽん

「ふふっ、いいですよ♪そろそろ潮時だと思っていたので教えてあげます♪」

「私はご主人様に調教してもらって、この方のメス奴隷になることを選んだんです♡」

つまり私は寝取られたんです♡」

「最近、作戦が失敗することが多くなっていましたよね？」

あれは、私が裏で手を引いていたからなんです♡」

「私の役目は、提督の秘書官になって作戦内容をご主人様に伝えたり」

「他の艦娘達をご主人様の奴隷に調教して鎮守府の戦力を削いでいく事です♪」

「ばれてしまわないように、まったく気持ちよくない提督とのセックスを受け入れたのだから、すべてはご主人様のため♡」

「でも、こここの艦娘達はほとんどご主人様の奴隷になってしまったので

私の役目も終わるころだったんです♪」

「ふふっ、信じられませんか？それでは見せてあげます♪私の本当の姿♡」



「どうですか提督♪以前の私では考えられない格好でしょう？」

「これがご主人様に染められた私の姿なんです♡」

「ふふっ、下手に動かないほうがいいですよ提督♪」

「ごこの艦娘達はほとんどご主人様の奴隷になった、つて言ったじゃないですか♪」

「提督には妙な動きをさせられないようにいつでも監視の娘が尾行してるんですよ♪」

「ほら、お外で提督の監視をしていた娘が、照準を提督の頭につけています♪」

「少しでも妙な動きをしたら頭がなくなっちゃいますね♪」

「そういうわけなので、提督は黙って私たちのセックスを見ていてください♪」



「お待ちせして申し訳ありませんご主人様♡提督に邪魔された分、今度は私が動きますね♡」
「んっ、んっ、あっ、あんっ♡どうですか私の腰使い？」
ご主人様が仕込んでくださったテクニックですよ♡」

「腰をいやらしく打ち付けて、時々押し当てたままお尻を左右に振る…♡
ふふっ、気持ちよさそう♡」

「提督とのセックスはこんなテクニックを見せる前に
終わってしまうので本当に退屈でした♡」

「ああんっ、そろそろ射精しそうですかご主人様？」

どうぞこのまま、私の中で出してください♡私もそろそろイッちゃいます♡」

あ♡♡

はあん♡

あ♡♡
んっ♡
んっ♡
んっ♡
んっ♡



「んっ、あああああああああああ♡♡♡♡♡」

「はあっ、はあっ、おなかが温かいです♡」

こんなに沢山の精液をありがとぅございませうご主人様♡」

ふん

ふん

どぶ

どぶ

どぶ

「どうですか？提督のおチンポでは、こんなに私を満足させられないんですよ」

これがご主人様との格の違いです♡」

「提督は女一人満足させられない最低の男なんです♪」

今日限りで提督の相手をしなくていいので、私もうれしいです♡」

「では私は提督を牢屋に連れて行きますね♪」

えっ、一回では収まらない？ふふっ、ではもうしばらく続きをしましょう♡」

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、しゅごいですごしゅじんしゃまあ〜♡」

「二回も出したのに全然萎えないなんてえ♡」

ふふっ♪もう提督の事は他の艦娘にまかせてしまっつて、このまま続きをしましょうか♡

はあ♡

はあ♡

回家!

「そういうわけなので提督、」

ご主人様とのセックスのために提督のお部屋をお借りしますね♡」

「と言っつてももう提督には必要のない部屋ですよね♪」

だつてこの鎮守府全部はご主人様の物になつたんですから♡」

「せいぜい牢屋でその粗チンを一人で慰めててくださいね♪哀れな提督さんは♪」

「にやあ♪ご主人だにやあ♥おかえりにや♪」

「多摩の教えた情報は役にたつたかにや？」

それならよかつたにや♪」

「それならご褒美が欲しいにや♪」

ご主人のおチンポで遊ばせてほしいにや♪」♥

「相変わらず大きいおチンポだにや♪」

まずは多摩のお手でシ「シ」するの「やあ」♥



「ふっ、いや、多摩のお手前は気持ちいいわよ？」

「ご主人が留守の間、一人で練習してたのにやあ♥」

「気持ちいいならよかつたわよ♪」

「ご主人のおチンポも暖かくて気持ちいいわよあ♥」

「いやー！我慢汁があふれてきたわよー！」

「いやあ〜♪つつてもいららぬら♪わよ♥まねん♪ママタタビみたら♪わよあ♥」

「ビクビクしておチンポかわいらら♪わよ♥主人、もう出てうたわよ〜」

あははは

「大丈夫にや♪このまま多摩が♪」

「好きなときに出してらさるわよあ♥」

「にやあぁっ！いつばい出たにやあ♡
気持ちよかつたかにや、ご主人？」

「…にやっ？っすごいなにや、まだ回いますにや」

「もう一回するにやご主人？にやあ♪多摩にまかせるにや♡」

「にや！？そっういえば忘れていたにや！」

ご主人が言つてた多摩の改装がすんだみたいにや！」

NONO

「早速見るかにや？にやあ♪」

それなら次はその格好で遊んで欲しいにやあ♡「♡」



「いやああ♪力があふれてくるにやあ♥」

「今回多摩は改装で出撃できにやかつたけど

次はご主人のために鎮守府攻撃に参加するにや♪」



「提督も、ご主人に調教された多摩を見たら

まじとビビッくりするにや♪楽しみだやあ♪」

「えっ？主人？いい感じにや？にやあ♪ありがとにや♥」

「この姿、すっくエッチな気分になつてすぐに発情しちゃうにやあ♥」

「今すぐ多摩のおまんこに入れて欲しいけど我慢にや！」

「多摩は好きなものは最後にとつておくタイプなのにな」

「だからまずは、多摩の力を試すためにさつまと同じ手」キにや♥」

「さつまよりももっと気持ちよくできるはずだから

期待するにや、ご主人♥」



「にゃーにゃーにゃーにゃー!どつどつにゃ?素手の感触もいいけど
スベスベのラバーの感触も気持ちいいにゃ♥」

「それと裏スジをこんな風に、指先でなぞるとソクソクするにゃ♪
ご主人が教えてくれたこと、多摩はちゃんと覚えたにゃ♥」

「にゃー!多摩の体も敏感になつてるから

乳首が擦れて気持ちいいにゃあ♥この姿最良にゃあ♥」

「でも、なんて耳と尻尾まで生えてるにゃ?

これじゃあ猫みたいにゃ!」

わんわん

「にゃー!?多摩は猫じゃないにゃー!

そんな事を言うご主人はこうにゃ♪」

「多摩も触ってないのにおマン」イキそう「や♥でも我慢はやー」
「ご主人も、もうちよつと待って欲しいにや♥」

限界まで我慢したほうが、最高に気持ちよくなれるにや♥」

「お手手激しくするけど我慢はやー」

「ご主人、多摩と一緒にがんばるにや♥」

「にやーにやーにやーにやーにやあーすごいにや♥」

「ご主人のおチンポ、ビクビクが大きくなってきたにや♥」

「もう多摩も限界にやーご主人、多摩と一緒にイッてほしいにやー」



「なんだや、いつかひん？」

「多摩のおくひんにいつばいせーえきがあつまったや♡」

「今から「ツクン」するにや♡いただきますにやあ♡

「くっ…くっ…くっ…にやあ♡美味しいにやあ♡」

「ねえ♡主人？次は多摩を抱っこしながらして欲しいにやあ♡

「ご主人にいつばい甘えながらエッチしたいにや♡」

「にや！エッチは出撃が終わってからにや！？」

「うう、ご主人イジワルにやあ…」

「じゃあ、鎮守府を落としたらいっばい「褒美頂戴」にや

♡多摩、ご主人のためにがんばるにや♡」

えー

プクプク

「貴様か！皆を操って私を襲撃したのは！」



ギチ

ギチ

「敗者にこのような恥辱を負わせるとは、いい趣味だな！ゲスめ！」

「足柄たちに何をしたのかわからないが、今すぐ皆を解放するんだ！」

「なに、私もすぐに同じようにしてやるだ？」

「ふっ、なにをする気が知らないが、この邪智を見くびるな！」

「ぐっ、くっくう…そんな粗末なモノで、この那智を墮とせると思ったのか？」



「なめるな！んんう、私は決して快楽に屈したりはしない！」

「私を犯したかったら好きなだけ犯すがいい！だが覚えておけ！」

「必ず貴様の手から、皆を救い出して帰還してみせる！」

あま

びん

「ん、ああっ！ふふっ、なんだもう諦めたのか、大したことないな」

「わかつたか、いくら貴様の粗末なモノで

私を犯しても無駄だと言う事を！」

「さあ、諦めたならさっさと私を降ろして皆を解放するんだ！

神妙にしていればきちんと捕虜として扱おうぞ」

「なっ、貴様！どこにござり付けてる！？

や、やめる！そこは入れるところでは……」

聖



「うわっうわっうわっうわっ」

「あ、ぐうっ！な、なんだ今の感覚は！？貴様！私の体に何をした！」



「尻での感度を100倍に上げた！？ぐっ、この卑怯者め！」

「うぐっ！あつ、あんっ！」

「や、やめろ！息ができなっ！あ、ああんっ！」

「あつ、あつ、あつ！ダメだ！」

「そんなに激しく突かれたら頭がおかしくなる！」

「もうダメだイク、イッてしまっうっ！」



「なんだこれは!? 頭が焼ける!」

「貴様! 私をこれ以上どうする気だ!」

「なに!? 私の頭をイジつて貴様の忠実な牝奴隷にする!?」

「やめる! やめてくれ! やめるおおおおつ!」

「-----」

「ふふっ♪なぜ私はあなたに逆らっていたのだろう?」

まじり
お尻

「主様♥いままで逆らっていて申し訳ない♥
もう私は完全に主様の忠実な牝ブタになつた♥」
「だが主様に逆らつた罪は万死に値する、
だからこんなタメな牝ブタにお仕置きをしてくれないか♥」
「二度と主様に逆らわないように骨の髄まで
私の主人が誰なのか刻み付けてくれ♥」



「あんっ、あっ、いらっ♡
奥を「リ」リされると子宮がうずうずする♡」



「それに、さつきまで痛いだけだった縄も
主様が縛ってくれたと思うと愛おしい快感に感じてくる♡」

「あっ、うんっ、ああんっ♡ダメだ、お仕置きのはずなのに
私のケツマン」が喜んでしまっている♡」

「主様♡私のケツマン」の中に射精してくれないか？

私の体の中にも主様を刻み付けて欲しい♡」

「私もイク♡イクイクイクイクイクイクイクイクイク♡」

あっ♡
あっ♡



「んあああああああああああああああああっ♡♡♡♡♡」

「すごい♡私の中が主様の精液で焼かれるようだ♡」

クッ

ブーッ

「ケツマン」でのセックスがこんなに気持ちいいなんて知らなかった…♡」
 「ふふっ♪こんな快感を知ってしまったらどんな艦娘でも逆らえないな♡」

「んあつ、なんで抜くんだ？」



「次は足柄たちを呼んで姉妹丼にする？みみっ♪
それはいい考えだ♥」

「私は奉仕でも足柄たちに負ける気はないぞん」

「口でも、胸でも、マンコでも、ケツマンコでも♥

私の体のすべてを使って主様を気持ちよくして見せるぞん♥」

おまんこ
おまんこ



「あら、どうしたの提督？おスポンもはかないで抱きついてきたりして♪」

「そうだったわね♪鎮守府の艦娘は全員差し出したら
ご褒美をあげる約束だったわね♪忘れてたわ♪」

「最初はおんなに嫌がってたのに…ふふっ♪」

「今では私達の言う事なら何でも聞くとっってもいい子になっちゃったわね♡」

「んもう、そんなに焦らなくても約束どうりに

私のおマンコに入れさせてあげるわよ♡」

「入ったわね♪どうかしら、仲間を裏切って得た快樂は？」

「うふふっ♪そんなにトロけたお顔しちゃって、

何も考えたくないって感じね♪からわいい♡」

「ほらほら、気持ちよくて浸っていたいののはわかるけど…」

「私この後、ご主人様に呼ばれてるの♡」

早く始めないと射精できないまま終わっちゃうわよ♪」

にゅん



「うふっ、そうそう♪がんばって腰をパンパン打ち付けてね♪」

ぬぷ

ぬちゅ

ぬちゅ

「まるでおサルさんみたいね♪そんなに気持ちいい？愛宕のおまん♪」
「中がウネウネと動いてすごいでしょ♪」
「これをご主人様に調教してもらったおかげよ♡」
「提督の子供ちんちんもピクピクしてきた♪もう射精しちゃうの？」

ぬぷ

「はい、ストップ♪」

「ダメよ、まだ射精しちゃ♪」

だって、提督の子供ちゃんじゃ、私が全然気持ちよくないもの♪」

「せめてもっと楽しませてくれなきゃ♪」

だから射精は我慢していっぱい腰をパンパンしてね♪」

「あっ、そうだ♪提督の好きなあれ♪やってあげる♡」



「提督は自分の艦娘が他人に寝取られて変えられた姿が好きでしょう？」



「だっていつもこの姿になると

そのカワイイおちんちんがビンビンになっちゃうもの♪」

「自分の艦娘の裏切った姿を見て興奮するなんて♪へ・ん・た・い・♡」

「ばんばかばーん♪愛宕、抜錨しま〜す♪」

「これが今の私なのよ♪提督を捨ててご主人様に忠誠を誓った愛宕の姿♡」

「提督は私達の気まぐれが

自分の艦娘を差し出すくらいししないと触れることもできない体よ♪」

「あら？あらあら♪

やっぱり提督のおちんちん、さっきよりも元気になってるわね♪」

「元気になりすぎて射精しちゃダメよ♪

ほーら、私のおっぱいの臭いを嗅いで落ち着いてね♪」



「あんっ、鼻息が当たってくすぐったい♪

私のおっぱいの臭い、そんなにいいの♪」

「あっ！うふふっ

母乳が出てきちゃったわ♪

えっ、妊娠？してないわよ♪」

「この姿になると自然と母乳が出てきちゃうのよね♪うふふっ、飲みたい？」

「だるメ♥残念だけどこのおっぱいミルクはご主人様専用なのよ♥

提督は見てるだけで我慢してね♪」

「あはっ♪そのお預けされたお顔、とってもかわいいわ♪

じゃあ、おっぱいミルクの代わりに、腰パンパン、再開してもいいわよ♪」

「すごい♪さっきから我慢してたから激しく腰をパンパンしてるわぁ♪」
「そんなに激しくすると、すぐに射精しちゃうわよ♪」

「でも、もうそろそろ時間だから」

「そうね…提督の好きなタイミングで射精していいわよ♪」

「あつても、射精するときにはちゃんと抜いてね♪」

「私のおマンコに中出ししていいのは」

「ご主人様だけなんだから♡」

「ほらほら、がんばれがんばれ♪」

「ばんばかばかばかばかばかばーん♪」

ぬちゅ

ぬっぴ

ぬちゅ

「んっ」



「あんなに可愛らしい提督さ、これはどうせなんやな〜」



おんこ

「中に射精しちゃダメって言ったでしょ♪

約束も守れない提督には

オシオキしなきゃいけないわね♪」

「あつでも私、これから

ご主人様の所に行かなきゃいけないし

でもオイタをした提督を

このままにしておくわけにもいかないし…」

「あつそうだわ！」

「代わりに高雄にオシオキをしてもらいましょ〜♪」

「うふふっ、高雄は私みたいに優しくないわよ♪」

ニヤッ

「もしかしたら提督のおちんちん

壊れちゃうかもしれないけど…しょうがないわよね♪」

「それじゃあ、がんばってね♥」

「高雄〜♪」



「聞きましたよ提督」

提督のいらつげも守らずに

申出してしまったんですって」

クスッ

ハイッ

「もう、私達のおマン」に申出しているのは

ご主人様だけって、あれほど言っておいたじゃないですか！」

「我慢もできないこのダメおチンチンは

射精させ続けて自分から

我慢すること覚えててもちろほしゅうん」

「それでは覚悟してくださいねデ・イ・ト・クッ」

「おはようございます、おはようございます」

「皮も被ってて、短くて…これではダメ」

私達の子宮には届かないわね」

「ん、なんですか提督？」

「モコモコって何を言ってるのかわかりませんよ」

「えっ私のおまんこを押し付けられて思ができません？」

そんなこと知りませんよ」

「あ」

「あ」

「あ、そんなおまんこ、おまんこを挿入してあげるわね」



「あん♪若臭いザーメンが出てきましたね♪
気持ちよかったですか？」

「よほど気持ちいいみたいですわね♪」

提督のハアハアって息が私のおまんこに
あたってくすぐったいですわ♪」

ハア
ハア

ゴッ

「では、続けてまいりますでしょうか？」

休む暇なんて与えませんよ、だってこれはオシオキですもの♡」

「提督も少しはおまんこを舐めたりして私を楽しませててくださいね♪」

私をイかせられたらオシオキも早く終わるかもしれませんよ♪」

クスッ 「ほら、ツツ「ツツ」、チ「チ」チ「チ」
精液で滑りがよくなって
気持ちさらさらだよわ〜」

オハッ
オハッ

「手の平でしてあげてもいいんですが…クスッ♪
提督のおチンチンは小さいから握れませんしね♪」

「あんっ♪そっつですよ提督♪バカにされて悔しかったら
私のおまんこをイかせてみてくださいませいわっ♪」

「おは、おは、その前に提督のおチンチンがまた射精しそっつですすけどね♡」

「ほら、ジュン〜ジュンジュン〜」

「ジュンとよか〜体び間もな〜」

射精させられるのはキスドレ〜ン〜」

ジュンジュン

「こんなのへっっちゃら〜あつ〜、バカね」

強がり言ってるのがバレバレですよ」

「だって呼吸が荒くなって、体全体もビクビクしてますもの」

でも、そんな事を仰るのでしたら〜」



「私を本気で愛してくれる人に出会ってあげたい♥
あせりのお誘いお願いします」

「御希望通りに頭がバカになるまで

射精させて差し上げます」

「提督、自分で言ったこととは

責任をもってくださいわ♥」

「おまんこっやはりの空になると体が火照ってきますね♡」

「おふっ♪どうしたんですか提督？そんなにクンクン匂いを嗅いで私のおまんこからいい匂いがしますか？」

「そうですね、ご主人様に改装された艦娘は

全身から男を痴情させる香りがするんですよ♡」

「その匂いを嗅ぎながらタマタマが空になるまで

射精し続けてくださいね♪」



「ほら、今度は激しく手を動かしてよ」おげげすおねい

はあり

はあり

「あはっ♪パイプみたいに震えてますよ♡」

提督のおチンチンは壊れちゃったのかしらっ?

「ほらほら、やめて欲しかったら私をイかせてみてくださーい」

そっそう、クリトリスも噛んだりしてよ」

「ダメっもツイッしますっ♡イクッーイクイクうらっ♡」
「あんっ♪提督が激しくするから私もイミてもごほうびをいっよわ♡」
「♡わわわ♡」



「いや、なんでも、胸ですわー」

んんん

「イッたと思いましたか？ふふっ、バカね」

「言ったじゃありませんか？聖にならなくて射撃を続けろって」

「この程度で終わってしまったら」

「オシオキにならないじゃないですか？」

「さあ、それでどうして？あんなに挿れたいの？」

「いや、挿れたいわー」





「あー、ご主人様を見習って下さい♥」

「あ〜」

「…やはり、薄くて不味いですね」

少しはご主人様を見習って下さい♥」

「そんなことだから自分の隣娘を寝取られるんですよ」

「それでは次は別の方法で搾り取ってあげますね」

高雄のお口とおっぱい、ちゅらでしてあげますよっかっ」

「失礼します司令官♪」

「あれ、寝ちゃってるんですか？せつかくご主人様が新しくなった私を司令官に披露してくれようとしたのによ♪」

「これはしばらく起きそうにありませんね、どうしますご主人様？」

「司令官が起きるまでおまんこしてくださいませんか！
ありがとうございます♡」

「司令官さんが起きたらビックリしちゃいますね♪
起きたら自分の秘書艦と知らない男の人がセックスしてるんですから♡」

グハッ♡
グハッ♡
グハッ♡



「ああんっ、大きい♡私のちっちゃなおマンコを無理やり広げて入ってきます♡」

「こんな嬉しいおチンポで毎日調教されたら誰だってただのメスになるに決まってるじゃないですか♡」

「この司令官はこんな気持ちよくて幸せになれること教えてくれなかったんですよ♡」

あんの

おまんこ



「ご主人様と出会えて本当によかったです♡

出会った頃に言った失礼な事はどうか許してください…」

「お詫びに、私のロリマンコを存分に使ってください♡ご主人様♡」

「あんっ、はあんっ、ああんっ、あっあっ…ああんっうんっ♡」
「すごいです♡子宮を突かれるたびにイッちゃいそうになります♡」
「♡私はもうご主人様のオナホールなんですから♡
好きなように使ってください♡」

あう♡

あ♡

は♡

「んぐっ、ああっ、はあっ、はあっ…あんっ、
ふわっ、わわっ、ああんっ♡」
「ダメですご主人様♡激しすぎて朝潮もうイッちゃいます♡
イクッ！イクイクウゥ♡♡」

イクッ！
イクッ！
イクッ！
イクッ！





「私だけ先にイッてしまったって申し訳ありません…」
「あれ？司令官起きたのですか？ふふっ」
お顔に私のお潮がかかってビショビショになればさすがに起きますよな」

「ふわあああああああああ♡♡♡」
「はあっ、はあっ、すごすぎですご主人様♡」
「ご主人様のおチンポが気持ちよすぎてお潮が出ちゃいました♡」

びしょびしょ♡

びしょ

びしょ

「なにしているって？もちろん愛するご主人様とセックスですよ♡」
「司令官が毎日のん気に寝ている間に
私はご主人様のメスに調教されてたんです♡」

「今日はその最終段階を司令官に見てもらおうと思ったのに
スヤスヤ寝てるんですもん♪」
「でも、起きたならば非見てくださいい♪朝潮が生まれ変わる瞬間を♡」



「ふわああっ♡力が沸いてきます♡
それにとってもスケベな格好で素敵です♡」
「これで私は司令官の秘書艦、朝潮、ではなく…」
「主人様専用メス奴隷艦、朝潮、に生まれ変わりました♡」

「司令官、マヌケな顔で面白いですね♪まだ理解できませんか？」
「主人様♡こんな人放っておいて
生まれ変わった朝潮の処女おまんこを味わってください♡」



「あっ、あっ…アアアアアアッッッ！
入れただけなのにさつきよりも何倍も気持ちいいです♡」
「ご主人様に二度も私の始めてをあげられるなんてうれしい♡」
「司令官、暴れようとしても無駄ですよ」
今日の司令官のお食事にお薬を入れておきましたからよ」

あんの

ボクッ

「見ての通り司令官を慕っていた朝潮はもうどこにもいません♡
♡ご主人様♡お好きなように動いてください♡
♡今度のご主人様がイクまでイッたりしませんから♡」



「あんっ、あんっ、うんっ、はあんっ♡
気持ちいい♡気持ちいいですご主人様ぁ♡」
「おマンコが壊れるくらい激しくしてください
私の子宮はキュンキュンしっぱなしです♡」
「あんっ♡ご主人様のおチンポもピクピクしてきましたね♡」

はっ♡

はっ♡

あん♡

やあん♡

「射精するときは是非私の中に♡体の中からご主人様を感じたいんです♡」
「ダメっ、私もイクッ!」一緒にイクてください♡ご主人様ぁ♡」



「ふにやあああああああああああああああああ♡♡♡♡」
「はあっ…はあっ…お腹…暖かい♡どうでしたご主人様？
生まれ変わった朝潮のお味は♡」
「んっ、申し訳ありませんご主人様
私イキすぎておしっこしたくなっちゃいました…」



「おトイレに行つて来てもらって下さいね」
「えっ…あつちんをさうですね
目の前であつちんをさうおトイレがめっちゃですね」

「んっ、ふわぁあっ♪」
「司令官のお顔におしっこをかけるのはいい気分です♡」
「そうだー司令官を私達艦娘の共同おトイレにするのはどうでしょう♪」
「ふふっ♪よかったですわね司令官♪」
鎮守府の司令官よりびったりなお仕事をもらえて♡

♡♡♡

♡♡♡

「この鎮守府の艦娘の事は
主人様が可愛がってくれますから心配しないでください♡
元司令官♡」





「あつ！はじめまして
ご主人様のご命令で今週の慰安所を担当しています、吹雪です」
「…つて、司令官じゃないですか！どうしたんですか、こんな所で？」
「ああ、なるほど！司令官が今日最後のお客さんでしたか」
「それでは時間ももつたいたのでさっさと始めちゃいませうか」

「一時間、私の体を自由に使ってもらって
かまいませんので、好きに動いてください」



「え、私は動きませんよ？好きに動いていって言ったじゃないですか」
「なんで私があなた達ごときに奉仕しなきゃいけないんですか？
体を使わせてあげてるだけでもありがたいと思ってください」

「それより今、睦月ちゃんと夕立ちゃんに
メッセージを送ってるんですから邪魔しないでください！」
「ほらほら、無駄話してないでさっさと挿入したらどうです
もう我慢できないんですよ？」



「吹雪のおまんこは気持ちいい」ですか...
それはよかったですね、それじゃあ好きなように動らせてください」

「えっ、喘ぎ声が聞きたい？はあ、注文が多いですね」

わんわん
わんわん

「あんあん、らめえ、あーん...これでいいですか？
えっ、感情がこもってない？」
「司令官の粗チンじゃ気分も乗らないですよ
テクニクもないし、おチンボももう射精しそうですよね？」

「ほら、すぐに射精しちゃいました
これなら前のお客さんのおじさんの方がまだ楽しめましたよ」
「それにしても情けなくないんですか？」
自分を裏切った秘書艦にお金をまで払って抱きに来るなんて」

ビーン
ビーン

「そんなに私のおマンコが忘れられなかったんですか？」
「はあ？私を痕取り返しに来た？」



「調子に乗らないでください、司令官はご主人様のお情けで
労働力として生かされてるだけなんですから」
「それに司令官の粗チンじゃ、ご主人様の極太おチンボ様に
勝てるわけ無いじゃないですか」



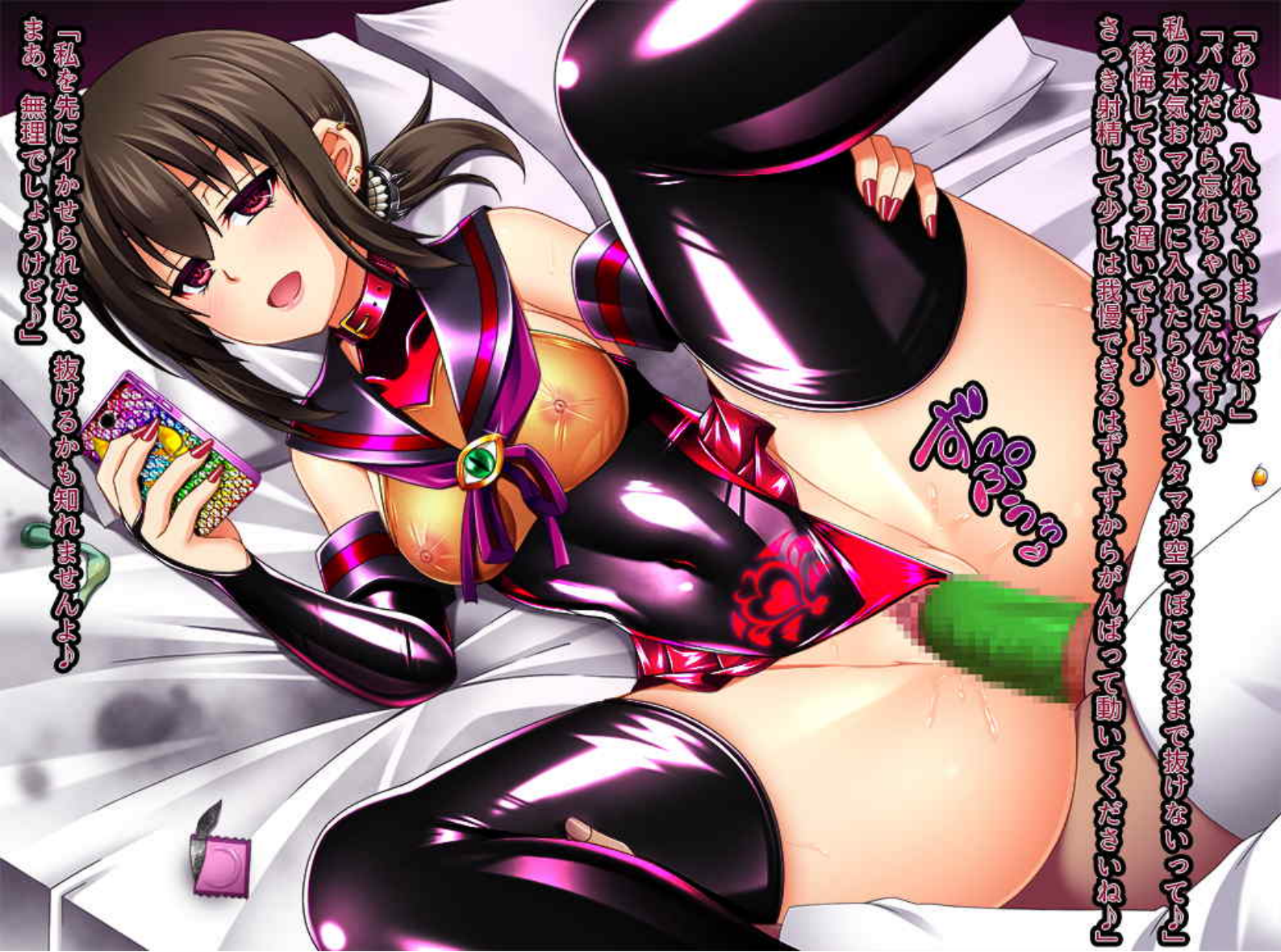
「そんな事もわからないほど司令官がバカだとは思いませんでしたよ」
「これはまた教えてあげる必要があるみたいですね」



「今日は司令官が最後ですし、特別に時間延長をしてあげます」
「自分で動いていいですよ」

「私が動いたら司令官のおチンポはすぐに勃たなくなりそうですし♪」

「どうしたんですか？私を寝取り返すんじゃないですか？」
「そうそう、そうやって情けなく勃起したおチンポを私のおマンコ目掛けて…」



「あゝあ、入れちゃいましたね！」
「バカだから忘れちゃったんですか？」
私の本気おまんこに入れたらもうキンタマが空っぽになるまで抜けないって！」
「後悔してももう遅いですよ！」
さっき射精して少しは我慢できるはずですがからがんばって動いてくださいね！」

「私を先にイかせられたら、抜けるかも知れませんよ！」
まあ、無理でしょうけど！」

おまんこ



「ほらほら、がんばってくださいよ」
「そんな腰つきじゃ一生私をイかせられないですよ」
「んっ？すみません、睦月ちゃんから返信がきたので
また勝手にやってみてください、休んじやダメですよ？」
「……………ぶっ！あははっ」
「すみません、睦月ちゃんたちに司令官が慰安所に来てるって言ったら
私の当番の時には絶対来ないでください」って」

「睦月ちゃんにも嫌われちゃってるんですね司令官」
「まあ、その粗チンじゃしょうがないですけど」



「あれ、みんなにバカにされて我慢できなくなっちゃいました？」
「泣きそうな顔をして、精子おもらししちゃってますよ！」
「私を寝取り返すんじゃないんですか？」
ほら、私はまだイッてないんですから、がんばって腰振ってください！」

「お尻の裏、面白いからあとで写真を撮ってみんなに見せてもいいですよね！」

びんびん

「あっ！夕立ちちゃんからも返信がきました」
「……………ふふっ」読んであげますね」
「提督さんの粗チンでご主人様と張り合うなんて無理っばい」
でも、提督さんが吹雪ちゃんに絞り取られるところは
面白そうだから見に行ってもいいっばい？」だそうです」

ずぼんっ

じゅわん

「司令官！夕立ちちゃんに来る前に出して早くして壊れないでくださいな」
もちろん手加減はしませんよ」



「貴様、コレハドウユウコツモリダ？」
「我々ニ協カラスル代ワリニ技術ヲ与エ体モ強化シテヤツタノニ」
「ヤハリ人間ハ信用デキナイ…」

「私ノ体ノ自由ヲ奪ツタクライデ、イイ氣ニナルナヨ人間」

がばん



「ナンダ、私ヲ洗脳スル気カ？ヤハリ人間ハ愚カダ」
「ソノ装置ハ艦娘ニシカ効果ガナイコトヲ忘レタノカ？」

「何、私ノ体ニ艦娘ノ遺伝子ヲ組ミ込ムンデ、艦娘ニスルダト！？
「バカナ、人間ニソナナ技術ガアルハズガナイ！」



「シンツ！ナンダコレハ！？下半身ガ熱クナツテキテ、

コンナ感覚知ラナイゾ！？」

「コノ私ガ漏ラシテル所ヲ見ラレルトハ屈辱ダ！」

「何？漏ラシテルノデハナク、発情シテ、オマンコガ濡レテイル？」

「アハハハ！」

「アハハハ！」

「何ヲ言ツテイル？深海棲艦ニオ前ラミタイナ
生殖本能ガアルワケガナイダロウ」
「マサカ！？コレガ艦娘ノ遺伝子ノ効果ナノカ！？」



「ンンッ！ダメダ、思考ガダンダン鈍ッテキタ…」
「ソウダ、コノ装置ハ艦娘ガ絶頂シナケレバ
完全ニ発動シナインダツタナ」
「ナラバソノ絶頂トヤララシナケレバイイダケノ話デハナイカ」

「残念ダツタナ人間、私ハ決シテ、ソノ絶頂トヤラハシナイ！」
「何か、体ノ中カラコミ上ゲテ来タ…」
「シカシ、イクラ私ヲ改造シテモ無駄ダ！」

「……………御主人様、私ノ調整ガ完了シマシタ
前ノ反抗的ナ私ハ消エ、今ハタダノ肉奴隷ニナリマシタ」
「ドノヨウナ命令モ、オ申シ付ケクダサイ
御主人様ノ望ミヲ叶エルノガ私ニ存在理由ナノデス」

キリシ

「私ノ女性器ヲ使ウノデスカ？了解シマシタ
存分ニ使ツテクダサイ」
「ハイ？モウ少シ感情ヲコメルノデスカ？
ソレト女性器デハナクテ、オマンコデスカ…ヤツテミマス」



「御主人様、生殖行為ヲシタコトモナイ、オマンコデスガ
ソノオチンポ？デ存分ニ犯シ尽クシテクダサイ」

「コレデヨロシイデシヨウカ？
…ハイ、アリガトウゴザイマス、コレカラ覚エテイキマス」

ドキドキ

ぽあ..あ..♡

「ハイ、ドキドキシマス、
我々ハ生殖行為：セックスヲシタコトガナイソデ」
「ソノ大キナオチンポガ
本当ニ私ノオマンコニ入ルノデシヨウカ？」





「ヲヲヲヲヲヲヲヲ♡」
「本当ニ入ツタ!コレガセツクストイウモノデスカ!」
「御主人様ガ腰ヲ振ルト私ノ中デナニカ
電流ヲ流サレテルミタイデス♡」

「ハイ、イイデス♡コレ、スキデス♡」
「ヲツ♡ヲツ♡ヲツ♡御主人様ノ
オチンポが更ニ大キクナツテキタ♡」

知
知



「アリガトウゴザイマス♥
無知ナ私ニコレカラ毛色々オシエテクダサイ♥」
「アナタ様コソガ、私ノ主♥」
艦娘ノミナラズ深海ヲモ支配スル王ニフサワシイ♥」

「コレカラハ御主人様ノ為ニ働キマス♥ダカラ♥」
「コレカラモ私トセツクスシテクダサイ♥」

Yakun7

「ふーふふん、ふっふふん、ふーふん、ふっふふーふん」
「今日も美味しいカレーができそうですね」
「あつ、そうでした！大切な調味料を忘れるとこらなりました」
「伊良湖ちゃん！あれ、持ってきてもらえるっ！」



クワッ...

クワッ...

「ありがとう、伊良湖ちゃん！」

「さあ提督、お昼のお仕事ですよ」

秘伝のカレーの隠し味！精液をたっぷり出してくださらね！



「えっ、もう出ない？何を言ってるんですか提督！」

「提督の今のお仕事は、艦娘達のご飯の調味料を提供すること、

それを条件にご主人様に生かしてもらってるんじゃないですか？」

「それができないなら、カレーのお肉になってもらうしかな

なくなっちゃいますけど、それでもいいんですか？」

「そりそりいそりやうて提督は素直に精液を出してればいいんです」

「改装された私の愛液と男性の精液のブレンドは最高においしいって、皆さんに評判なんですから」
「あんっ！あんまり激しいと揺らしてこぼしちゃりますよ」
「あら、もう出ちゃいそうですか？」
「ふふっ、どうぞ遠慮なく私の膣内に出してください」

あんな
あんな



「はいっぴゅっ、びゅっぴゅっ……っ」
「あらあら、これでは全量が足りませんね
それに、ズズウ、濃さも全然薄くなっていますよ」

とろっ

びゅっ

びゅっ

「提督、もっと頑張って精液出してくださー」
「えっ、毎日朝昼晩で絞りとりられて
体力の限界だから休ませて欲しいですか……」
「もう、しょうがないですね」



「……なんて、休ませるわけないじゃないですか」
「勘違いしちゃダメですよ」
提督は以前の鎮守府の指揮官ではなくて
今は私たちの資源、家畜なんですから」



「家畜に人権なんてありません」

役にたつか、死んで私たちの食料になるかの

二つに二つの道しかないんですよ」

「ほら、死にたくなかったらいつぱい出せるように

頑張って腰を振ってください」私も手伝ってあげますから」



「あんっ♡やっぱりこの姿になると母乳があふれて
すぐに服が透けちゃいますねっ」
「ふふっこの姿を見るのは久々ですか？
そうですね、普段は間違ってお料理に母乳が入らないように
気をつけてますからねっ」

「私の母乳には強力な媚薬効果があるので
必要以上に摂取すると大変なことになってしまいますものねっ
「では提督、私の母乳を飲んで精力をつけてくださいっ」
大丈夫、ちゃんと適量ですからっ」
「死にたくないんでしょっ？はい、あ〜んっ」

いっ

んっ

ひっ

「あはっ、やっぱりすごい効き目ですね！
さっきと違ってむさぼるようなビストン♪」
「やればできるじゃないですか提督♥♪テクニックはないですが♪」



「あつ、別に私は提督と愛し合ってるわけではなく
調味料を出してもらってるだけなので気にしないでくださいよ」
「提督は好きなように腰を振って射精してくださいませ」

「んっ♪ああん♪激しくなってきましたよ」

「いつもこの位、あんっ♪」

「積極的に協力してくれれば手間も省けるんですけどね♪」

あーん♡

あん♡

あーん♡

「うふっ♪射精しそうですか？」

「おチンポがピクピクしてきましたよ♪」

「もう少しだけ我慢してくださいね」

「そのほうがたっぷり精液出せますから♡」

「ほらほら、がんばって♡がんばって♡ください♡」

「美味しいカレーができるかどうかは提督にかかっているんですから♪」

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ



「んんっ、はあぁぁぁん♡」
「すごいですね！今までで一番量が出ましたよ！
これなら味付けには十分な量です！」



「味は、ズズウー、うん！これだけ濃ければ申し分ないですね」
「こんなに出来るなら、これから毎日私の母乳を
飲んでもらいましょうか」
「……ってあれ、提督？」

ひびくッ
びびくッ

びびくッ

びびくッ

びびくッ
びびくッ

「あらあら、気絶してしまっただようですね」
「ここに置いておいても邪魔ですし……」
伊良湖ちゃん！もう夕食まで使わないから
「これ」をしまっけて置いてもらえないかしら？」

「タッ」

「ありがとう♥伊良湖ちゃん、ちょっと味見してみる？
今日のカレーはきつといつもよりおいしいですよ」
「おいしい？よかった♪これでカレーは完成♪
じゃあ次はご主人様のご飯ね♪」
「伊良湖ちゃんも手伝ってくれるの？ありがとう♪
あつ、でもこっちは精液の隠し味を入れてはダメよ
入れるなら私たちの母乳だけね♥」



「はあ、鈴谷の呼び出し、何かと思いましたが
今日のご主人様へのご奉仕当番の変更だそうですわ」
「せっかくなさみにしてましたのに、仕方がありませんから
今日は自分でするしかありませんわね」

はあ...

「あら、提督まだいたのですか、寝けの続き？
あ、そんな事も言いましたわね」
「そうですわね、今日は暇になつてしまつたし...
よろしくてよ、私の靴を舐めなさい」





「うふふっ、相当我慢してたみたいですね」
許可を出したとたん、夢中になって私の靴裏を舐めたんですね」
「ああ、そのオマヌな姿を見てると」
先ほどの惱みなどは忘れてしまってるんですね」

「元は艦隊の指揮をしていたあなたが、今は無様に私の足を必死になって舐めてらる」
「悔しくないんですの？」



「そうですわね、今の提督は私の言う事には絶対服従のフタさんでしたものね」
「梅じいなんて思うはずがありませんわよね」
「あつ、んんっ、ほら私の指、激しく動かしてますからグチュグチュと淫らな音が聞こえるでしょう」
「そうなの？ てるのか気になりますっ！ 見たらさんでっすのっ！」

「ううっ、絶対に見せませんわ」
「家畜にオナニーを見られたらと思う人なんていませんもの」
「あつっ、♡をならならイキそうですわ」
「提督はそのまま私の靴を舐め続けなさい」

「あつ、あつ、ひやあああああつ♡♡」
「はあつ、はあつ、やはり惨めな提督を見ながらのオナニーはいいですね」
「んっ♡でもまだ満足できませんわね、本当なら今頃
気が狂いそうになるほどご主人様に犯してもらってたはずですよ」



あつ♡あつ♡あつ♡

「ただ今は鈴谷が恨めしいですよ！
ああもうー思い出したら腹が立ってきましたわー！」



「いつまで足を舐めてるんですの！
床が汚れてしまいましたからさっさとお拭きなさい！」

「本当に使えないフタですわね！
ちよつとご褒美をあげたからつて調子だのなんだのやありませんわねー！」
「日いけない、私としたことが
こんなフタさんにアタつてもしょうがありませんわね！」

「ほら、床を拭き終わつたら今度はここを舐めてキレイにしろ
どつて、私のおマンコですわよ！」
「私らしくもなく、無意味にあたりでしまったお詫びですわ
特別にご褒美ですわよ！」

「あんの♡激しいですわね」
「荒い息も当たって、これではフタさんではなくてワンちゃんみたいですからね」
「あつ、はあんの♡さあ、そこですわねクリトリスの部分は入念にしなさい」



「なかなか上手ですわね」
「これだけのテクニックを持っているのは、
今度は何かにセックスさせてあげたいわね」
「うれしい？そうですわね」
「この私のおマンコにおチンポを入れられるんですもの、
光栄に思っています」

「ほらほら、今舐めてる私のヌレヌレおまんこに
そのピンピンに立ったおチンポを入れたいならがんばって舐めなさい」
「今度は奥のほうに舌を入れて……あっ、ああああんっ♡」



♡おまんこ♡

♡おまんこ♡

「あらですかっおまんこの中を舌がウネウネ動いて気持ちさらさらすっ♡
「やあんの♡そんなに激しくしたら、もう私イッてしまってますっ♡」

「どうですか司令官、おトイレのお仕事には慣れましたか？」
「まだ抵抗してるみたいですね、いい加減おトイレとして自覚を持ってください」

がばっ

「もうこの鎮守府はご主人様のモノになったんですから
提督の居場所ももうここしかないんですよ？」
「そうゆうわけなので私も早速使わせてもらいますから、がんばってくださいね」



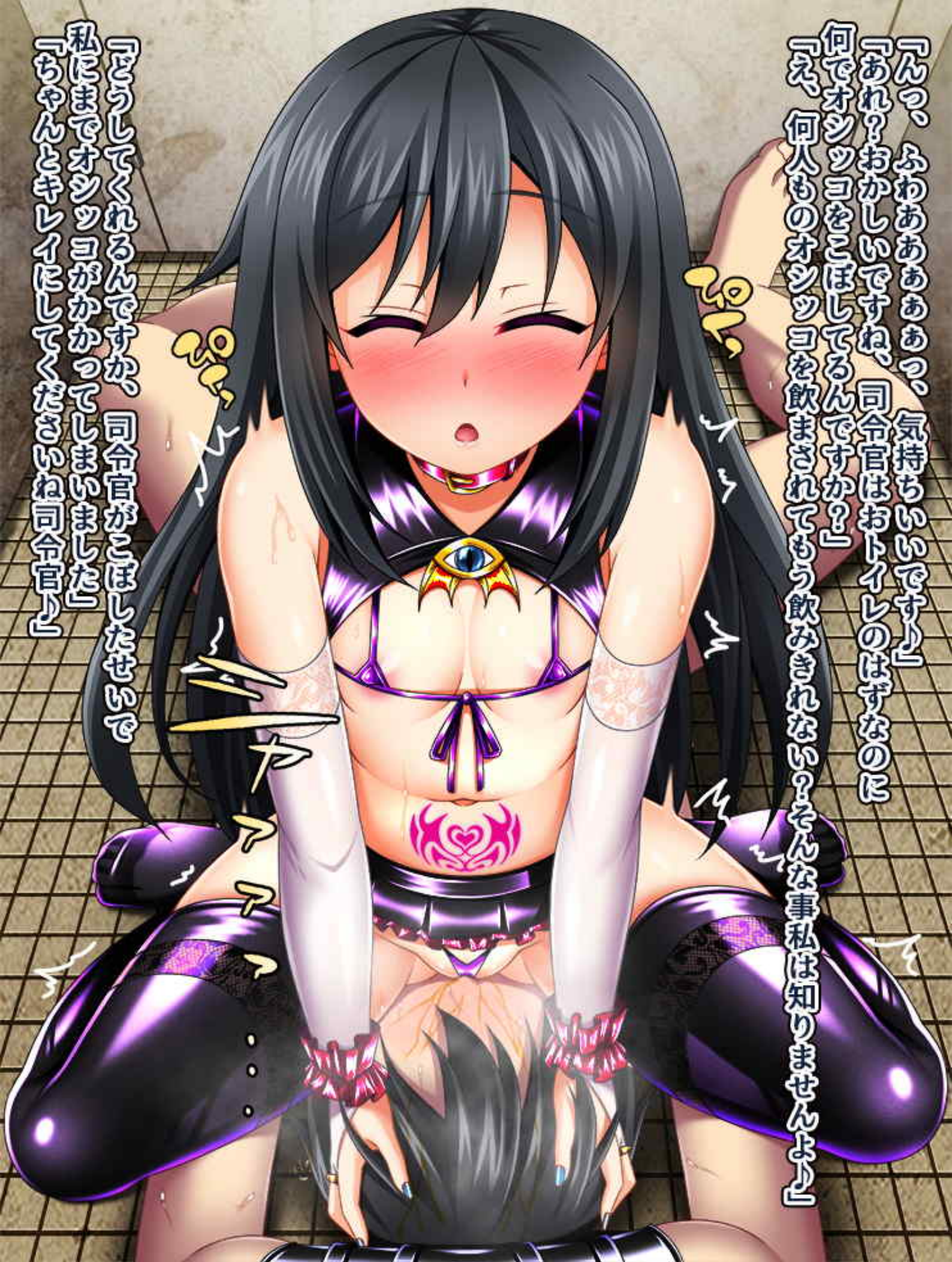
「どうしても私はまだオシッコが出そうだからなのでお手伝らしてくださったからね」
「そうですよ、司令官のお回で私の尿道を刺激してオシッコを出させてくださいからね」

「あんっ、その調子で刺激を与え続けてくださいわぁっ、あんっ♡」
「んんっ！いいですね、だんだんオシッコしたくなってきましたわぁ」
「ちゃんとお回で飲み干してくださいわぁ」



「んっ、ふわあああああっ、気持ちいいですよ」
「あれ？おかしいですね、司令官はおトイレのはずなのに
何でオシッコをこぼしてるんですか？」
「え、何人ものオシッコを飲まされてもう飲みきれない？そんな事私は知りませんよ」

「どうしてくれるんですか、司令官がこぼしたせいで
私にまでオシッコがかかってしまいました」
「ちゃんとキレイにしてくださいね司令官」



「そうです、そうやって丹念に舐め取ってくださいね
おトイレは清潔に使うものですから」
「あっ、あんっ♡そんなに私のおマンコばかり舐めまわして
ずいぶんどイヤらしいおトイレですね」

「クスクス」そんなにされたら、オシッコ以外の別のお汁も出てきちゃらますよー」
「これもちゃんとキレイに舐め取ってくださいね
おトイレらしくお仕事はきちんとこなしてください」

おまんこ



「あつ、んっ、ああんっ♡あつ、はあんっ♡やあんっ♡」
「司令官が気持ちよくするから、朝潮のエッチなお汁が次々と出てきちゃりますね」
「これじゃあずっとお仕事が終わりませんか？」
「私も忙しいんですから早くキレイにしてください」

「クスクス♪早く終わらせたいなら
エッチなお汁が出る前に早く舐め取ってしまえばいいじゃないですか」
「んっ、はあんっ♡よくできましたね、司令官♪
だいぶキレイになりましたし♪それでは私は戻りますね…って、あれ？」



「司令官？なんでおチンポが立ってるんですか？まさかおトイレの癖に私のおマンコを舐めて興奮しちやったんですか？」
「気持ち悪いですね、それだったらそんな事を考えられないようにしてあげますっえいっ」

「どうですか？朝潮のおマンコに鼻と口をふさがれて息ができないですよね？」
「息したいですか？それでしたら、ううん、私をイカせられたら息をさせてあげますっ」



「ほらほら、がんばってくださいよ」
早く私をイカせないと思ができなくて死んでしまいますよ」
「でももし司令官が死んでしまっても
ここはおトイレなので司令官にはお似合いの死に場所ですね」

「ああんっ、あっ、あんっ♡そうです、それが嫌だったら
必死に私のおマンコをイジってください♡」
「あっ、んっ、やあんっ♡はっ、あんっ♡
喜んでください司令官、私もうイキそうなのでもうすぐ息が吸えますよ」

ビッブッ!!

ニヤニヤ

ニヤニヤ



「あっ！クスクス♪こんな死ぬ思いまでして
気絶までしたのにまだおチンポはピンピンのままですね♪」
「どこまで変態なんですか司令官♪これはまだまだ体に教える必要がありますね♪」

「あつ、すみません、今出ますー！」
コンツコンツ



「長居しすぎちゃったみたいですね、司令官への躄けはまた今度までおあずけですよ」
「それでは次の方へのおトイレの勤めもがんばってくださいいね司令官」

「またお仕事中におチンポを立たせちゃダメですよ」



「御主人様、私三奉仕ノ仕方ヲ教エテクレナイカ？」
「私モ御主人様ヲ氣持チヨクシテアゲタイ」

「ヨコワイツレバイイノカ？ワカッタ、ヤツテミル」
「ダンダン固クナツテキターヨレハ氣持チイイトイウヨトナノカ？」





「ワカッタ、御主人様ガヨロヨンデクレルナラ私ハナンデモスル♡」
「次ハドウスレバイインダ？ヨノママ包ンデレバイイノカ？」

「今度ハオチンボヲ私ノ触手デ包メバイインダナ、ヤツテミル！」
「コレデイイノカ？」
オチンボ、私ノオマンヨミ入レナクテモ氣持チイイノカ？」

ズル
ズル

「触手ヲ上下ニヨスレバイノカ、ワカッタ！」
「ソッ、ソッ、ナカナカ難シイナ！」
「ッーオチンボガビクビクシテキター！」

「私ノ中ニ入ツテタトキミタイター！気持チイインタナ御主人様♡」
「ソレナラモット早くンテミタラ」
「モットモット気持チヨクナレルハズーソッ、ソッ、ソッ」

いぢぢ
いぢぢ
いぢぢ





「ラッ、ラッラッ！ー白イノガデテキター！
私ノ中デダシタトキモヨウヤツテ出テタンダナ！」
「スンスンッ！ヨク匂イ、深海ニイタトキト同シ匂イカスル！
タダ深海ト違ウノハコレハ暖カイ♡」

「アコレハセーシトイウノカ？
男ガ気持チヨクナルト出テクルモノ」
「ラッ！ソレナラ私ハチャント
御主人様ヲ気持チヨクデキタンダナ！」

「アツクハナクハナク♡」

「ラッ?ヨレヲ飲ンデミレバイイノカ?ワカッタ」
「ジュルルルルルウ、ラッ!ナンダヨレ!?オイシイ!」
「レロツ、チュウ!レロレロツ!」
「チュウ、チュウ!ヨシナニオイシイモノ飲ンダヨトガナイ!」



「ンツ、ンツ、チュウ、レロンツ♥」
「モツト飲ミタイ!ラッ!オチンボヲクワエレズモツト出ルノカ!」

「ハムツ、ジュツ、ジュルルルルルツ！
チユツ、チユバ！アムツ、アムツ！」

「オチンポノ味モオイシイ！
デモヤツパリ、セーシガ飲ミタイージュポツ、ジュポツー」

あふ

あふ
あふ
あふ

「御主人様、早くセーシ頂戴♥
チユツ、チユウツ！ンツ、ジュバツ！」
「触手モ使ツテ気持チヨクスレバ、早く出ルワカッタ」



「ナン、ナン♡レロッ、レロレロ♡ンッーチユウッ、チユウ♡」
「ナン、ナン♡レロッ、レロレロ♡ンッーチユウッ、チユウ♡」

「ンッ、ンッッー」
「スゴイ、サツキヨリモ、オチンポビクビクンッテキタ♡」
「モット激シクスレバ早く出ルカナ？」

「んっ、んっ」
「んっ、んっ」
「んっ、んっ」



「んっ、んっ、マダ、飲んぢやいフエナイノ？」
「ウエエミタメテ、ゴデマゼレバイインダナ」

「レロッレロッ、グチャッ、グチャ、ピチャッ、アムッ、アムッ」
「レ〜、コレヲエイノヲア御主人様？」



「ングツ、ングツ：ハアツ、ハアツ
レロレロ、アムツ、アムツ：ゴックンツ！」
「ララツ！サツキヨリモ味ガハツキリシテオイシイ！」
「ヨレスキ♥ヨレ毎日飲ミタイ♥御願イシマス御主人様
ヨレ、毎日私ニ飲マセテ♥」

「ワカッタ！イツパイ御主人様ノ敵ヲ倒スカラ
ソシタラゴ褒美ニ、セーシ頂戴♥」

始末

カキ

